

## 疑問だらけの『伊勢物語』『筒井筒』

― 定番教材をどう読み解くか ―

### 妹 尾 好 信

#### はじめに

長年にわたって日本の古典文学研究に従事してきたが、今振り返れば、つねに中心にあったのは、古典作品の本文をどのように読み、どう理解すべきかということの探究であつたと思う。それは、時代が隔たることで言語も社会的・文化的な状況も異なり、書かれていゝる内容を正確に把握しにくくなっただけではなく、早くに原本が失われ、転写を繰り返して今日に伝えられた古典文学の本文がどれほど原形をとどめているのかはなだ疑わしいからである。今ある本文をどのように読むべきかという問題に加えて、本来あるべき本文はどうなのかを考えることが古典文学の研究にはつねについてまわる。古典文学の研究は、まさに本文との格闘だと言つてよいのである。

誰もが知っているような有名な作品でも、その状況は変わらない。

ここでは、平安時代の文学を代表する作品の一つである『伊勢物語』から、とりわけよく知られた「筒井筒」の段（第二十三段）を取り上げて、その本文解釈上の諸問題について考えてみたい。高等学校における古文教材の定番である「筒井筒」の本文がいかに多くの疑問点を含んでいるかがおわかりいただけることと思う。

まず、「筒井筒」の本文を、今日最もよく用いられるテキストである「新編日本古典文学全集」（福井貞助校注・訳、平成六年 小学館 底本は学習院大学蔵三条西家旧蔵伝定家筆本。以下、「新編全集」と略す）によつて掲げる（傍線や記号は引用者による。改行を一部変更した）。

むかし、<sup>A</sup>ゐなかわたらひしける人の子ども、井のもとにいいで遊びけるを、おとなになりにければ、男も女もはぢかはしてありけれど、男はこの女をこそ得めと思ふ、女はこの男をと思ひつつ、親のあはすれども聞かでなむありける。さて、このと

なりの男のもとより、かくなむ、

筒井つ<sup>B</sup>の井筒<sup>C</sup>にかけしまろがたけ過ぎにけらしな妹見ざるまに

女、返し、

くらべこしふりわけ髪も肩すぎぬ君<sup>D</sup>ならずしてたれかあぐべき

などいひひひて、つひに本意のごとくあひにけり。

さて年ごろふるほどに、女、親なく、頼りなくなるまに、もろともにいふかひなくてあらむやはとて、河内の国、高安の郡に、いき通ふ所いできにけり。さりけれど、このもとの女あしと思へるけしきもなく、いだしやりければ、男、こと心ありてかかるにやあらむと思ひうたがひて、前裁のなかにかくれあて、河内<sup>E</sup>へいぬるかほにて見れば、この女、いとうよう化粧じて、うちながめて、

風吹けば沖つしら浪たつた山夜半にや君がひとりこゆらむとよみけるを聞きて、かぎりなくかなしと思ひて、河内へもいかずなりにけり。

まれまれかの高安に来て見れば、はじめこそ心にくもつくり<sup>F</sup>けれ、いまはうちとけて、手づから飯匙とりて、笥<sup>G</sup>子のうつは<sup>H</sup>ものにもりけるを見て、心憂がりて、いかずなりにけり。

さりければ、かの女、大和の方を見やりて、

君があたり見つつも居らむ生駒山雲なくしそ雨はふるともといひて見いだすに、からうじて大和人、「来む」といへり。よろこびて待つに、たびたび過ぎぬれば、

君来むといひし夜ごとに過ぎぬれば頼まぬものの恋ひつつぞ経る

といひけれど、男、すまずなりにけり。

以下、傍線を付したA～Hの八箇所について、順を追って本文上の問題を検討する。

#### 一 A 「ゐなかわたらひしける人」とは行商人か？

冒頭の「ゐなかわたらひしける人」の実態はよくわからない。古く、一条兼良の『伊勢物語愚見抄』（以下、『愚見抄』と略す）には、「田舎にて世をわたる人の子どもなり」とあって、田舎で暮らし生計を立てる人の意に解している。細川幽斎の『伊勢物語闕疑抄』（以下、『闕疑抄』と略す）では、「常にはゐの中に居ずして、時々田舎へ下るを云」と言っていて、都から時々田舎へ下る人と解した。そして、契沖の『勢語臆断』になると、「ゐなかわたらひは田舎に往来して産業をなすなり」と、田舎に往き来して仕事をする人の意と解し、藤井高尚の『伊勢物語新釈』では「ゐなかにかよふはものうりかひする事とぞきこゆる」と言っていて、室町時代の旧注以来近世にかけて田舎

回りの行商人説が徐々に定着していった。これを受けて、高校の古文教科書でも地方回りの行商人と注されることになった。

一方、近代の注釈書には地方官をさすとする異説もあって、「日本古典文学大系」(昭和三十二年 岩波書店。以下、「大系」と略す)では「田舎を廻って行商すること。地方官をさすともいう」と頭注に記す。「日本古典文学全集」(昭和四十七年 小学館。以下、「全集」と略す)では「田舎まわりの商人などのことになるが、ここは、地方暮らしの役人のことをいったものである」と言い、地方官説に傾いている。片桐洋一氏『伊勢物語全読解』(平成二十五年 和泉書院。以下、『全読解』と略す)はこれを受ける形で、「地方官でもかまわないが、任命されて赴任し、任期を終えて京へ帰る国司のクラスではなく、その土地でずっと生活している郡司以下をイメージしなければなるまい」と説かれる。

少年・少女期から和歌を詠み合う優雅な振る舞いから見て商人のような庶民とは思えず、その地に定住していることから行商人ではありえないだろう。ただ、男女の家は隣り合っており、共同井戸を使用していることから、官舎のような集合住宅に住んでいたとおぼしい。すると、在地の豪族や有力者が任命されるという郡司のような身分でもなく、おそらくは都から派遣されていた中・下級の地方官であって、何らかの事情で任期を終えても帰京せず、現地に土着したというようにきさつが想定されるのではないか。土着国司

としては『源氏物語』の明石の入道の例が思い出されるが、もっと下級の地方官にも、都に戻らず任地に定着してしまうことが少なからずあったのではなからうか。男の親については記されないのだから、男が婿入りした女の両親は健康上の問題ゆえに帰京をあきらめて現地に留まったが、やがて相次いで亡くなったという事情かもしれない。

近年の注釈は地方官説に傾いているように見受けられるが、行商人説も可能性として併記し、否定し去てはいないものが多いようだ。高校の教科書では行商人説が根強く残って、なかなか改まらないことに悲憤慷慨する声もあった(池田俊朗氏「田舎わたらひ」考)『東洋』第三十七巻第十五号、平成十三年三月)。私が編集に関わっている第一学習社の教科書でも、平成二十五年刊の『新訂国語総合』までは「田舎わたらひ」を「田舎回りの行商」と注している。平成二十九年刊の改訂版で「田舎で暮らしを立てること」と変わって行商人説が消え、令和四年刊の『精選言語文化』になって「下級の地方官のことか」と地方官説への言及が追加された。検定を気にしつつの遅々たる修正である。「あなかわたらひしける人」とは田舎で生活していた人だけ言っているのであるから、「具体的に行商人や、地方官と解したりする必要はない」と言う大井田晴彦氏『伊勢物語現代語訳・索引付』(令和元年 三弥井書店)のような意見もあるが、それでも詮索しなくなるのが人情というものであろう。

## 二 B「筒井つの井筒」か、それとも「筒井筒井筒」か？

本段は「筒井筒」の段と呼ばれることが一般化しているが、その由来となった男の詠歌の初句は、定家本をはじめ世に通行する多くの本に「筒井つの」とある。したがって、定家本を底本とする注釈書はそろって「筒井つの」の本文を採用するが、「新編全集」の頭注に、「つ」は不明。語調を整えるために置いたものか」と言うごとく、諸注「つ」の解釈には苦慮している。「語調を整える」とは、和歌の初句として五音に整えることであろうから、つまり意味上「筒井の」でよいところに「つ」を加えて無理に五音にしているのだからと推測するのだが、なぜ「つ」なのかがわからない。文法的に説明できないのだ。「筒井筒井筒」とある他本文について「新編全集」は、「同趣の語を重ね、下の「井筒」を引き起す序の形であろう」と言い、「の」は誤写によるか」と「筒井筒」の本文が本来のものと見ているようだが、初句「筒井筒」を序詞のように解するのはいかがか。それを言うなら機能としてはむしろ枕詞であろう。それにしても「筒井筒井筒」ではほとんど無意味な同語反復であり、まるで早口言葉である。一字足りなくとも「筒井の井筒」の方がずっとわかりやすい。むしろ「つ」を衍字と見て、初句は字足らずの「筒井の」が本来の形であったと考える方がよいのではないかと思う。

高校の『言語文化』教科書では、調べられた範囲内ではあるが、

ほとんどが「筒井筒」としている中で文英堂版と筑摩書房版のみが「筒井つの」の本文を採用している。ただし、両書でも教材の表題は「筒井筒」なので、表題と歌詞との間に齟齬が生じている。

## 三 C「井筒にかけし」とはどうしたことを言うのか？

同じ和歌の第二句「井筒にかけし」もまたわからない。この動詞「かく」は、およそ次のような四通りの解釈がなされている

- ① 測り比べる。
- ② 賭けて誓う。願を掛ける。
- ③ 心を懸ける。目標とする。
- ④ 欠ける。不足する。

『伊勢物語』の注釈書で最も採用されているのが①説で、「新編全集」の頭注にも「背丈を筒にかけてくらべ計った」とある。この意は古語辞典にも掲げられており、『旺文社 古語辞典（第十版増補版）』には、「かく【掛く・懸く】」の項に、

- ⑧ ある物を他にくらべる。⑦ 測りくらべる。「筒井つの井筒に  
・ けしまろがたけ過ぎにけらしな妹見ざるまに」〈伊勢・  
二二〉

とあるのだが、用例が本段の歌だけなので解釈の参考にならない。石田稜二氏の角川ソフィア文庫『新版伊勢物語』（昭和五十四年）では、補注に、「かけし」は、次の女の返歌との関係や歌意から見て

「くらべる」と訳したいところである。しかし、「懸く」にそういう意味は本来なく、井筒を標準として身の丈を計った意とするのが穏当であろう。」と言う。一方、早く南波浩氏は「日本古典全書」(昭和三十五年 朝日新聞社。以下、「全書」と略す)において、「かけしは缺けてゐた。不足してゐた」と言い、阿部俊子氏「講談社学術文庫」(昭和五十四年 講談社)にも、「欠けし。井筒の高さに満たなかったの意か」とあり、④説を唱える。しかしながら、片桐洋一氏『全読解』(平成二十五年)は、「量る」は、現代語でも「目方をかける」という言い方が残っているように天秤衡に懸ける意であって、身長に言うのには無理があり、「欠く」も一部が失われている場合に言うのであって、身長に言うのには無理がある。ここはやはり、「願を賭ける」意とすべきであろう。(中略)つまり、井桁の高さを越したら結婚しようと、井桁に願を懸けていたのである。」と言われて、「計る」「欠ける」両説を斥けて②の「願を掛ける」説を支持された。最新の注釈書である大井田晴彦氏『伊勢物語 現代語訳・索引付』(令和元年)にも「かけし」は、(背丈を)はかり比べた、とする解釈が多いが、井に向かって誓った、約束した、と解するのがよい」とあって、近年は②説が有力な感があるが、はたしてどうか。

③説は、渡辺実氏「新潮日本古典集成」(昭和五十一年 新潮社。以下、「集成」と略す)に、「目標にすること。身長が井筒の高さに達する頃には隣の娘と結婚できようと、自分の成長を待っていた末の、求愛

の歌」とある解釈である。竹岡正夫氏『伊勢物語全評釈』(昭和六十二年 右文書院。以下、『全評釈』と略す)には、「この「かく」は「賭く」で、それを目標として、それに達すればきつとくするというふうに賭けて誓約する意のものである」とあって、③説と②説を融合させたような解釈である。

このように「井筒にかけし」の解釈は定説を見ないのであって、古文入門期の高校一年生に教室でどう教えればよいのか教師は途方にくれるのではないかと心配してしまう。私見では、この歌の構造から見れば、過去において「井筒にかけ」ていた自分の背丈が現在はその井筒の高さを「過ぎ」てしまっているだろうと言っており、動詞「かく」と「過ぎ」が過去と現在を対比する対語として用いられているのであるから、「かく」は背丈が井筒の高さに足りない状況を表しているのと見るのが妥当に思える。すなわち、④説に傾かざるを得ないのである。

#### 四 D 「君ならずしてたれかあぐべき」の解釈は？

先の歌に対する女の返歌の下の句「君ならずしてたれかあぐべき」にも二様の解釈がある。

① 「君ではなくて」説

② 「君のためではなくて」説

これはすなわち、髪上げの儀式において髪上げ役を誰が行なうの

かということで見解が二つに分かれるのである。「大系」の頭注は②説をとり、「髪上げは夫ではなく、髪上げの親がある」と記す。「髪上げの親」については、森本茂氏『伊勢物語全釈』（昭和五十六年 大学堂書店）が『西宮記』『日本紀略』『御堂閔白記』などを引用して、「裳着のときに理髪・上髪・結髪のことも行われ、髪上げは女の手で行われたようである。その女を髪上げの親という」と説かれる。つまり、髪上げは男のものではないから①説ではなく②説になるのである。「全集」（『新編全集』も）、「集成」、「新日本古典文学大系」（秋山虔氏校注、平成九年 岩波書店）以下、「新大系」と略す）など、通行する主要な注釈書が②説を採用しているのでそちらが有力なように見える。しかしながら、竹岡正夫氏『全評釈』が「この一首を表現通り素直に解釈すれば、あなたと幼時から馴れ親しんで比べて来たこの振分髪を、あなたでなくて一体誰が上げられましょうか、当然あなた以外の人には誰も上げられません、というふうに解さざるを得ない」というように、和歌の表現上からは①説で解釈するべきである。なお、片桐洋一氏『全読解』は、「あなた以外の誰が髪上げをすることができましょうか。あなた以外の誰が私を結婚させることができるでしょうか」と現代語訳し、「あなたと結婚するための髪上げでなくて、誰が髪上げをさせるでしょうか。誰も私の髪上げを強いることはありません」と注する。「私が結婚相手と決めているあなた以外の誰が指示して私の髪上げをさせることができよう

か」の意で、やや複雑な解釈である。和歌の解釈としては素直に①説でよからうと思う。

## 五 E 「河内へいぬるかほにて見れば」は、どんな顔で見た？

さて、結婚後、女の親が亡くなり、生活が不如意になった男は、河内の国高安の郡に別に通い所を持つようになる。それでも、もとの女は不快そうな顔もせず送り出すものだから、男は妻の浮気を疑い、出て行ったふりをして庭の植え込みの陰に隠れて妻の様子を窺うのだった。そのあたりの本文は、

男、こと心ありてかかるにやあらむと思ひうたがひて、前栽のなかにかくれあて、河内へいぬるかほにて見れば、とある。一見何の問題もない記述のようだが、「河内へいぬるかほにて見れば」という表現にはどこか引くかかる。「河内へいぬるかほ」で見るとは、どんな顔で見ていたのか。この時男は、間男がやって来るのではないかと疑いに満ちた顔で見ていたに違いない。「河内へいぬるかほ」は、男が家を出て行く際に妻の前で見せた顔であつたはずである。そう考えると、「河内へいぬるかほにて」の十文字は、本来「前栽のなかにかくれあて」の前にあるべきだと思えてくる。すなわち、

男、こと心ありてかかるにやあらむと思ひうたがひて、河内へ<sup>a</sup>

いぬるかほにて、<sup>b</sup>前裁のなかにかくれぬて、見れば、

とあったものが、転写の過程で転倒してしまったのであろうと思う。類話を載せる『古今和歌集』と『大和物語』の該当箇所<sup>a</sup>の記述は、次のようにあり、傍線部<sup>a</sup>・<sup>b</sup>がそれぞれ対応している。

○『古今和歌集』巻十八・雑下・九九四左注

<sup>a</sup>河内へいくまねにて、<sup>b</sup>前裁の中に隠れて見ければ、

○『大和物語』第四百十九段

さて、い<sup>a</sup>でていくと見えて、<sup>b</sup>前裁の中にかくれて、男や来ると見れば、

転写の過程で文の一部が切り取られて本来の位置ではない箇所に紛れ込んだと見られる例は他にもある。第六段、いわゆる「芥川」の章段の一節である。

ゆく先おほく、夜もふけにければ、鬼ある所ともしらで、神さへいといみじう鳴り、雨もいたう降りければ、あばらなる倉に、女をば奥に押し入れて、

傍線部「鬼ある所ともしらで」の位置がおかしい。この部分は「あばらなる倉に、女をば奥に押し入れて」にかかること明らかなので、本来その近くにあるべきである。すなわち、

ゆく先おほく、夜もふけにければ、神さへいといみじう鳴り、雨もいたう降りければ、鬼ある所ともしらで、あばらなる倉に、女をば奥に押し入れて、

とある方がごく自然である。おそらく転写の際に「鬼ある所とも知らで」の九文字を書き落としたので行間に補記してあったものを、後の転写の際に誤った位置に本文化して写したために生じた錯誤であろうと思う。第六段も多くの高校古文教科書に採用されている有名章段であるが、この妙な行文に何の疑問も呈さず注釈されているのはいかがなものか。

## 六 F「まれまれ高安に」、「来てみた」のか「来て、見た」のか？

男が前裁の陰に隠れて見ていると、女は念入りに化粧をして縁に現れ、物思いする風情で「風吹けば沖つしら浪たつた山夜半にや君がひとりこゆらむ」と一人山越えをする男の身を思いやる歌を詠む。それを聞いた男は妻を限りなく愛しく思い、河内へも行かなくなつた——のであるが、それでもごくまれに高安の女のもとに行つたのだという。それを本文には「まれまれかの高安に来て見れば」と書く。この「来て見れば」を、「来てみれば」と解するか「来て、見れば」と読むかで、男の取った行動が変わってくる。すなわち、

- ①「見てみれば」説——たまたま来てみたところの意↓対面説  
②「来て、見れば」説——やって来て、女の様子を窺って見ているとの意↓垣間見説

の二つの読み方があり、①の場合は、久しぶりに高安に来てみると



女の態度はこうであったという文脈にとらえられ、②の場合は、長らく来なかったため男は気まずくて女に会えず隠れて様子を窺っていたという流れと理解できる。①では男は高安の女と対面したことになり、②では対面せずによそながら女の様子を見たことになるのであるが、ほとんどの注釈書は①説なのか②説なのかあいまいである。しかし、類話である『大和物語』第百四十九段では、この箇所が「久しくいかざりければ、つつましくて立てりける。さてかいまめば」とあって、はっきりと垣間見したと書いている。おそらく本段も垣間見説で読むのが正しかろうと思う。この箇所は、先の「前裁の中にかくれゐて、河内へいぬるかはにて見れば」とある箇所と対比的に書かれていると考えられるので、「見れば」を漢字表記して、「垣間見すると」の意に解するのがよい。東京国立博物館蔵『異本伊勢物語絵巻』をはじめとする絵巻、嵯峨本やその流れを汲む奈良絵本などにおいて、高安の女が飯をよそっている場面では、必ず男は垣間見している図柄で描かれている。『伊勢物語』の絵画史では圧倒的に垣間見説なのである。

## 七 G「はじめこそ心にくもつくりけれ、いまはうちとけて」の解釈は？

ところが、垣間見説をとった場合、続く「はじめこそ心にくもつくりけれ、いまはうちとけて」という表現との間に齟齬が感じられ

る。ここでは「はじめ」と「いま」を対比した書き方がされているので、あたかも高安を訪れた男が女と対座すると、女は以前とは異なり、すっかりうちとけて気を許し、男の前で自らしゃもじを持って飯をよそうという不作法な行動に出たかのように読めるのだが、はたして「まれまれ」にしか来なくなった男に対してそんなに「うちとけ」た態度を見せるものだろうか。俵万智氏の『恋する伊勢物語』ちくま文庫 平成七年 筑摩書房）では、この場面について、

この高安に住む女、男が通いはじめた頃は、なかなか奥ゆかしくふるまっていた。けれどだんだん親しさが増すにつれて、気どりのない態度で接してくる。ご飯をよそう時なども、

「あ、あなたのは私がよそってあげるわ、ハイ、どうぞ」

と、自ら杓子しやくしを手にとったりする。

と解説する。高安の女は、久しぶりに男が来てくれたものではしゃいでいるのかもしれないが、それにしても久しぶりゆえの緊張感があったはずで、そんなに馴れ馴れしくはできまいと思う。そこで参考になるのが『大和物語』第百四十九段の記述である。同段には、「われにはよくて見えしかど、いとあやしきさまなる衣を着て、大櫛を面櫛にさしかけてをり、手づから飯もりをりける」とある。これは、かつて対面した折の印象と、垣間見た現在の振る舞いとを対比して述べていることになる。『伊勢物語』でも同様のことをやや稚拙な表現で記述しているのではなからうか。「はじめ」とは付き合いは



じめた頃に対面した時のことであり、「いま」とは垣間見している現在である。女が「うちとけ」ているのは、男への親しさが増したからではなくて、男はもう来ないと思つて気を許していたのである。もしかすると、男は初めて高安の女と逢つた時にも垣間見た経験があり、その時に見た高安の女の様子と、今久しぶりに訪れてまた垣間見している男の目に映つた女のありさまとを引き比べている表現なのかもしれない。

なお、「心にくも」を「心にくし」の語幹に「も」が付いた特殊な用法と説明する注釈書があるが、ここは單純に踊り字「ゝ」を脱した誤写と解すべきである。高校の教科書ではさすがに各社とも「心にくくも」と訂正している。

## 八 H 「けこのうつはもの」とは何か？

高安の女が自らしゃもじを持って飯をよそつていたという「けこのうつはもの」にも二通りの解釈がある。それは、「けこ」に「筍子」の字をあてるか、はたまた「家子」と解するかによる。古くは家の子郎党をさす「家子」説が優勢であつた。『愚見抄』には「けこは家子也。家の中にめしつかふ物のうつは物に、てづからもりける也」とあり、『闕疑抄』にも「けこのうつはもの、家子と書り」とある。ところが、近世になつて賀茂真淵の『伊勢物語古意』に、「けこは或説に家の子にて家人奴婢の事といへるも理りなきにあらねど古本

に籾子と書万葉にも家にあれば筍に盛る飯をともしあれば飯籾の器てふ意也けり」とあつて、初めて飯を盛る器説が現れる。藤井高尚の『新釈』にも「けこは筍子にて飯もる器なり」とある。この「筍子」説は戦後の主要な注釈書である「大系」、「全書」、「全集」、「新編」も同様、「新大系」などがそろつて踏襲したため、ほとんど定説化する。高校の教科書でも当然「筍子」説が用いられることになる。

しかしながら、「筍子」そのものが器をさすので、「筍子のうつはもの」という言い方は明らかに重複表現であるから適切ではない。「家子」説の方が正しいと言わざるを得ない。近年の注釈書では、竹岡正夫氏『全評釈』が、「けこ」（けことも）は家族や家来・召使と解するのが妥当」と言い、片桐洋一氏『全読解』も「けこ」は「家子」。(中略)家の子。妻子・召使など家に属する小者。眷属」と注するように、「家子」説をとる注釈書も現れてきたが、それでもいまだ圧倒的多数は「筍子」説をとる。高校の新課程教科書においては、管見の範囲では東京書籍版のみ「家子」説をとり、「筍子」説には脚注で触れるのみである。今後「家子」説がさらに復権することを期待したい。

## おわりに

以上のごとくで、『伊勢物語』第二十三段は、解釈の定まらない表現や、誤写によって本文が損傷したとおぼしくて正しく解釈できない箇所が散見する、極めて難解な章段なのである。それでも古文入門期の教科書に採用されるのは、幼なじみの男女が思春期を迎えて恥じらい合って一緒に遊ばなくなるが、実は互いに将来の結婚相手はこの人と思いつめており、女に結婚話が生じると男はあわてて和歌を贈って愛を告白、女もそれに応えて望み通りに結婚するというロマンチックな展開が思春期に近い高校一年生の共感を呼びそうなこと、また、そうして相思相愛で結婚したにも関わらず境遇の変化で男が他に通い所を作るも、夫の身を思いやる妻の和歌を聞いて心を入れ替えるという歌徳説話性、一方新しい女は妻とは対照的に不作法な振る舞いを見せて男の心を取り戻せないという典型的な二人妻説話の持つ女訓性が、平安時代の貴族社会における価値観や優雅を尊ぶ風流心を鮮明に描き出しているので、教材としてふさわしいと考えられているからであらう。

それはそれで結構だが、異説の存在や本文の不審箇所については素通りしたり目をつぶったりするのではなく、古典作品の文章には、時代が隔たっているため現代人にはなかなか理解することが困難な箇所や、書写を繰り返して今日に伝わったため本文が損傷して意味

不明になってしまった箇所が少なからず存在することを生徒にちゃんと伝えるべきであろうと思う。むしろその方が生徒の古典に対する興味を喚起できるのではないかと思われるのである。

### 〔付記〕

本稿は、令和四年七月九日（土）に開催された二〇二二年度広島大学国語国文学会研究集会（オンライン開催）において、「特別講演」として話した内容に基づいて文章化したものである。

なお、文中に引用した『伊勢物語』古注釈書の依拠テキストは次の通り。

・『伊勢物語愚見抄』：片桐洋一著『伊勢物語の研究〔資料篇〕』（昭和四十四年 明治書院）

・『伊勢物語闕疑抄』：「新日本古典文学大系」『竹取物語 伊勢物語』（平成九年 岩波書店）

・『勢語臆断』：『契沖全集』第九卷（昭和四十九年 岩波書店）

・『伊勢物語新釈』：『架蔵の文政元年版本』

・『伊勢物語古意』：『架蔵の無刊記版本』

・『古今和歌集』・『大和物語』の引用は、「新編日本古典文学全集」（小学館）に拠った。

### 〔追記〕

本稿校正中に、仁平道明氏「井のもとに出てあそびけるを」（『解釈』令和五年三・四月号）に接した。短い論考だが、「あなかわたらひしける人」の実態を古代の史料に基づいて考察し、「京から地方の荘園等に集団で下ってきて住み着いた人たち」であるという。聞くべき見解である。

— せのお・よしのぶ、広島大学・名誉教授、二松学舎大学・特別招聘教授 —